

「三等重役」のイメージの変遷

——源氏鶏太『三等重役』論

服部 このみ

はじめに

文学作品から流行語が生まれることはよくある。文学作品から発生する流行語はさまざまだが、その中に「○○族」のようなある一定の傾向をもつ集団を表す言葉が存在する。特定の集団を現す言葉を生みだした文学は、当時の時代状況と密接に関わっていることはもちろん、むしろ時代に先行した内容が描かれている可能性があると思われる。また、そのような作品は当時ベストセラーとなっており、多くのことが多く。

本論では、昭和二十七年のベストセラー小説であり、「三等重役」という流行語を生みだした源氏鶏太『三等重役』について考察したい。

源氏鶏太は今ではほとんど知られていないが、昭和二十年代後半から五十年代にかけて広く活躍していた作家である。サラリーマンを主人公に据え、会社の中の人間関係を中心に描いた小説を世に広めた、いわゆるサラリーマ

ン小説の第一人者であると言える。(1) このジャンルは日本独特のものであるとともに、源氏作品の世界観が弘兼憲史『島耕作』シリーズに代表される今日のサラリーマン漫画の起源となっているという指摘(2) もあることから、日本の文学・文化を語る上において重要な作家であると思われる。

『三等重役』の分析から、流行語化・ベストセラー化した要因として三つの理由が浮かび上がってきた。それは源氏が「三等重役」という言葉のイメージをマイナスからプラスのものへ変化させたこと、『三等重役』において源氏が独自の戦後派重役像を生みだしたこと、そして独自の戦後派重役像を生みだすにあたって重要となる桑原社長の性意識が、純潔教育の重要性を訴え始める当時の状況において理想的なものであったことである。本稿ではその中から最初に挙げた、「三等重役」という言葉のイメージの変遷について論ずる。

一では、源氏鶏太の略歴と『三等重役』の概要、「三等重役」という言葉の意味を確認する。「三等重役」という言葉が初めて使われた段階では戦後派重役が自称として用いていたのに対し、流行語となった段階では、戦後派重役を指す他称に変化していることを指摘する。

二では、「三等重役」という言葉が初出した「艶福物語」の分析をし、「三等重役」の印象を確認する。「艶福物語」では戦後派重役自らが「一等重役」や「二等重役」より下であることを強調するための蔑称として用いられていることを示す。

三では、「艶福物語」を経て『三等重役』を連載するにあたって、「三等重役」という言葉のイメージにどのような変化が加えられたかを見ていく。題として採用することによって自称から他称へ変化するとともに、源氏が意識的に「三等重役」という言葉がもっていたマイナスのイメージを薄めていることを指摘する。

四では、『三等重役』における「三等重役」の印象を分析する。「三等重役」という言葉に蔑みの要素があるこ

とは否定しないものの、その要素ができうる限り薄められていること、戦後派重役の代名詞として用いられている傾向にあることを確認する。また、「三等重役」の比較対象が常に「四等か五等」の「番外重役」であり、作品内では「三等重役」が一番上の存在として描かれていることを指摘する。

これらにより、『三等重役』では「三等重役」という言葉に積極的な意味が付与されており、それに伴って『三等重役』の戦後派重役・桑原社長が「名実共に立派な社長」⁽³⁾として描かれていることを示したい。

一・

「はじめに」でも述べたが、現在源氏鶏太の名前を記憶している者はほとんどいないと言ってよいだろう。そこで、分析に入る前に源氏鶏太の略歴と『三等重役』の概要を確認しておきたい。

まず、源氏鶏太の略歴を主に『読売新聞』夕刊で連載されていた「出世作のころ」⁽⁴⁾を元に確認していく。本稿ではとくに『三等重役』発表までを詳細に述べる。

源氏鶏太は明治四十五年に富山市で生まれる。本名田中富雄。昭和五年に県立富山商業高校を卒業して大阪の住友合資会社に入社し、会計課に勤務。戦後住友本社がGHQの財閥解体指令によって解散を命じられた際、「長年の経理事務の経験を買われて」残務処理を担当した。一方で「十二、三歳のころから」小説や詩を創作しており、昭和十年には「あすも青空」を『サンデー毎日』の大衆文芸に応募、佳作入選している。一時期創作から離れたものの、戦後「生活のあまりの苦しさに懸賞金がもらえたらという気持ち」もあり、雑誌への投稿活動を再開する。昭和二十二年『オール読物』に「たばこ娘」を投稿、掲載が決定し、以後会社勤めをしながら作家活動をするこ

になる。昭和二十四年『スタイル読物版』に「浮気の旅」を発表、初めてサラリーマンの世界を描き「自分の鉞脈を発見したような気がした」という。昭和二十六年「英語屋さん」「颱風さん」「御苦労さん」により、第二十五回直木賞を受賞。その直後に『サンデー毎日』に連載された『三等重役』は多くの流行語を生むなど人気を博し、一躍人気作家になるとともに、サラリーマン小説の第一人者となった。昭和三十一年作家活動との兼業に限界を感じ、会社を退職。十返肇は、退職を機に「初期のサラリーマン・ユーモア小説から次第に脱皮し」「虚無的な感じがより強く漂いはじめた」⁽⁶⁾と作風の変化を指摘する。また、晩年には「従来 of 明朗ユーモアに飽き足らなくなり」⁽⁶⁾ブラックユーモアを志向、現世に悔いを残して死んだサラリーマンの幽霊など、幽霊・妖怪が登場する小説を多数書いた。昭和六十年没。

次に、『三等重役』の概要を確認する。

『三等重役』は『サンデー毎日』昭和二十六年八月十二日号から翌年四月十三日号にかけて連載された小説である。『三等重役』の連載によって『サンデー毎日』の発行部数は「三十万部そこそこ」から「八十万部近く」⁽⁷⁾になり、昭和二十六年十二月に発行された単行本『三等重役』が昭和二十七年全国ベストセラーズ七位になる⁽⁸⁾など、当時爆発的な人気を誇った作品である。一話完結型の連載小説で全三十五話からなる。大阪近くの城下町にある南海産業株式会社では、パージで会社への出入りを厳禁された奈良さんによって、当時総務部長だった桑原さんが社長の座についていた。追放解除が近いという報道に落ち着かない毎日を送っていたが、奈良さんが脳溢血で倒れたことにより、桑原さんの社長の座は盤石のものとなる——というのが第一話の内容であり、桑原さんが戦後派重役であることが示されている。

源氏鶏太のサラリーマン小説では仕事についてはほとんど描かれず、主に社内における人間関係を描くことで成

り立っており、『三等重役』もそれに該当する。桑原社長は人事課長の浦島さんとともに社員同士を結婚させることに励み、最終的には十一組の夫婦の仲人をする。基本的に一組の夫婦が誕生するまでの物語が一話を通して描かれるため、社内の人間の結婚に関する話は十二話存在する。⁽⁹⁾ また、桑原社長が女性から誘惑されるものの肉體関係を結ぶことなく終わるといふ浮気未遂のエピソードが四話挿入されるなど、『三等重役』では恋愛や結婚、浮気といった男女関係の話に紙幅を費やしている。また、金銭の問題を扱うことの多い源氏らしく、ボーナスやへそくりに関する夫婦間での攻防も描かれるなど、社内および家庭内の人間関係を通して、サラリーマン生活の哀歎を描いた作品となっている。

それでは最後に「三等重役」という言葉の意味を確認する。

『日本国語大辞典』には「昭和二六年（一九五二）、源氏鶏太作の小説「三等重役」から広まったことば」⁽¹⁰⁾ であると書かれている。確かに『三等重役』によって流行した言葉であるが、源氏作品で「三等重役」という言葉が最初に用いられたのは『三等重役』ではなく、昭和二六年三月に『サンデー毎日別冊』で発表された「艶福物語」である。「艶福物語」には「三等重役」の定義が次のように説明されている。

「重役にもいろいろあるんだ。僕なんか、まあ、三等重役といふところだ。」

「あら、重役さんにも汽車みたいに等級があるの？」

「それがあるんだよ。」
「一等重役といふのは親の代からの資本家で、生れながらの重役だ。ところが、平社員時代から将来を約束されてゐて、所謂幹部教育を受け、重要ポストを渉り歩いた結果重役になつたやうな人は、まあ二等重役だ。戦争前の重役はたいいこれで、曾和さんなんかもこれにあたる。」

「ちやア、三等重役といふのは？」

「……………」

「ねえ、いうてよ。」

横山さんはいひたく無かつた。しかし、こゝまでいつてしまつたからには、三等重役の説明だけを省略できるもので無い。横山さんは慚然とした面持でいつた。

「戦争に負けたおかげで、思ひがけなく浮び上ることの出来た僕なんかをいふのだ。したがつて、重役とは名ばかりで、収入は社員当時とそんなに変わらないのだ。」

（源氏鶏太「艶福物語」・傍線引用者）

ここで説明されているように「三等重役」とは、公職追放の影響によって重役が足りなくなつたことで浮かびあがることの出来たサラリーマン重役を指す。この言葉は源氏の造語ではなく、「（引用者注―源氏の勤める）会社の三等重役である高橋淡氏が、自ら莞爾としてそれを名のり、私に教えてくれた」⁽¹⁾ 言葉であると言う。資本家にあたる「一等重役」、エリート社員の「二等重役」の下に該当する重役であるために「三等」という言葉が用いられている。

『日本国語大辞典』では「経営はまかされていても資本の実権はない重役」とあり、基本的な意味は今と変わらない。しかし、「艶福物語」や源氏が教えてもらった時点での「三等重役」が、サラリーマン重役自身が用いる言葉（自称）であるのに対し、『日本国語大辞典』に掲載された二つの用例では、「三等重役」ではない立場の人間がサラリーマン重役を指す言葉（他称）として使用されている。『現代用語の基礎知識』一九五四年版には「小会

社のなり上り重役や、サラリーマン重役などを皮肉るのに三等重役を名をもつてし⁽¹²⁾ たとあり、自称から他称への変化が昭和二十八年の段階で生じていたことがわかる。

自称から他称へという変化は「三等重役」という言葉のイメージを考える上で重要なものだと考えられるが、一体どの段階で変化したのだろうか。分析の結果、流行語化の過程で変化したのではなく、『三等重役』連載時に源氏が意識的に変化させていることが明らかになった。それでは、時系列に沿って「艶福物語」および『三等重役』における「三等重役」の印象の変遷を見ていきたい。

二.

ここでは「艶福物語」で「三等重役」がどのような言葉として使われているか分析する。「艶福物語」における「三等重役」は、「二等重役」と自分を比較し自嘲するための言葉として機能している。「艶福物語」の内容は次の通りである。

ページの影響で思いがけず重役に就いた横山文平さんは、得意先のK商事から招待された赤坂の待合で芸者・豆太郎に再会する。十年前横山さんが接待係をしていた際、豆太郎に頼まれて重役の曾和さんとの仲をとりもつた過去があったが、曾和さんとは終戦と同時に切れて、「女中と芸者の合の子みたいな勤め」をしているという。

横山さんは豆太郎に言い寄られ、月五千円で世話をすることになる。毎週土曜の午後を豆太郎のアパートで過ごし、かつて彼女が曾和さんに仕込んだという小唄の練習に励む日々を送る。

「曾和さんの女であった豆太郎に惚れられたこと」で「重役としての自信」がつき、「曾和さんに似て」きた横

山さんであったが、公職追放解除によって曾和さんが戻ってくることに決まると、「豆太郎に「あなたとの仲は今日かぎりにして、曾和さんにあたしをとりもって。」と頼まれる。

曾和さんの祝賀会の日、二人の仲をとりもつことを決めた横山さんは酔った勢いで豆太郎から習った小唄を披露する。横山さんは十年前と同じように、曾和さんを豆太郎が待つ部屋へ案内するが、「もう、わしのやうな年寄の出る幕ではなささうぢゃないか。あとは君にまかせる。」と、「いかにも曾和さんらしい、わッはッはッはッ、と豪傑な笑ひ声」を残して去っていく。それを見た横山さんもまた、「こんな女との浮気はごめんだ。」と、思わず「わッはッはッ、」と笑ってしまうのであった。

「艶福物語」では「三等重役」という言葉が六回用いられている。

- ① 「重役にもいろいろあるんだ。いってみれば、僕なんか、まア、三等重役といふところだ。」（横山さん）
- ② 「ぢやア、三等重役といふのは？」（豆太郎）
- ③ しかし、ここまでいってしまったからには、三等重役の説明だけを省略できるもので無い。（語り手）
- ④ 「どうせ、わしは三等重役だよ。」（横山さん）
- ⑤ こゝで本物に復帰されては、またもとの正真正銘の三等重役に戻るよりしかたがない。（語り手）
- ⑥ まるで、あなたは所詮三等重役よ、といはれたやうな気持だった。（語り手）

（丸括弧内の人物は話者を示す）

「艶福物語」における「三等重役」の使われ方には三つの特徴がある。一点目は「三等重役」自身が使う言葉で

あることだ。①と④の話者はこの物語の「三等重役」・横山さんである。また、「艶福物語」の語り手は横山さんと非常に密着しており、いずれも横山さんの気持ちを代弁していることから、③⑤⑥も横山さんが話者であると考えてよいだろう。

二点目は必ず否定的な意味合いで用いられることである。豆太郎が「三等重役」の意味を問う②を除き、「三等重役」という言葉は常に否定的な言葉として用いられている。

一つずつ説明していくと、①は「僕なんか」と自分自身を軽んじていることから、「三等重役」が評価の低い重役を意味する言葉であることがわかる。③では「三等重役」の説明を躊躇する様子が描かれており、「三等重役」が「一等重役」「二等重役」と比較した際に説明し難い意味を持つ言葉であることがわかる。また、④⑥は否定的な意味の語句を伴って用いられることの多い「どうせ」や「所詮」という副詞とセットになっている。最後に⑤では「本物」が「復帰」した場合に「もとの真正正銘の三等重役に戻る」と述べており、「三等重役」が本物の重役と見なされていないことがわかる。

ここで注目したいのは、「艶福物語」では「三等重役」という言葉自体に否定的な意味合いが多く含まれており、それを強調するための言葉が伴っていることだ。後述するが『三等重役』では、「三等重役」に対して否定的な評価・印象を述べるといふ形がとられている。

そして三点目は「一」ですでに述べたように、「一等重役」「二等重役」の下に該当する言葉であることだ。

「艶福物語」の戦後派重役である横山さんは、常に元重役の曾和さんと自分を比較し、曾和さんに追いつこうとする人物として描かれているが、「艶福物語」において「三等重役」の比較対象は常に「二等重役」であり、「三等重役」という言葉は自らがそれより下であることを強調するための蔑称として用いられていると言える。

三.

「艶福物語」で用いられた「三等重役」という言葉と題材に注目したのは当時『サンデー毎日』編集長をしていた辻平一であった。辻は『三等重役』について次のように回想している。

「この題名は、いかにも、ドギツイ感じがした。しかし、世間には当時、そうよんでもふさわしいような、大物は追放されトタンに重役に昇進したサラリーマン重役がすくなくなかった。どこの会社にもいることだった。これがサラリーマン諸君の、興味の対象になっていることは、充分に予想された。だから、いくらかドギツイけれども、「三等重役」という題名を、源氏さんに承知してもらった。」

「重役にあてつけがましい感じがしたのは、私とて、源氏さんと、変りがなかった。」

「いやな題名だね」

といわれるかもしれないし、その時のことも考えておく必要があるかもしれない。

「うちの社には、三等重役なんか、ひとりもいらっしやいませんよ」

という返事ぐらいでは、釈然とはしないだろうから。しかし、さすがに、この題名に文句をつける重役はいなかった。」

(辻平一『文芸記者三十年』毎日新聞社)

辻は一話完結型の物語にすることと題を「三等重役」とすることを条件に、源氏に『サンデー毎日』への連載を

もちかける。二つの条件に対して源氏は次のように思ったという。

〈私は、やってみようと思った。が、「三等重役」という題は困るといった。かりにも私は、現職のサラリーマンである。そういう人間が重役の上に三等をつけるなんて身のほど知らぬということになる。〉

〈「艶福物語」のときには、この言葉になんの反響もなかった。が、辻平一氏は、これをおぼえていたのだ。私は、いろいろと考えたあげく、あえて「三等重役」でいこうと決心した。そのことでしかられたら会社をやめればいいのか。作家にならそれくらいの決心が必要だと思った。〉

〔出世作のころ〕『読売新聞』昭和四十三年八月五日

これらの回想から、源氏も辻も「三等重役」という言葉に否定的な印象を抱いていることがわかる。源氏が勤める住友系の不動産会社の重役のみならず、当時毎日新聞社の社長であった本田親男もサラリーマン重役にあたることから、二人が相当な覚悟を持ってこの言葉を題にすることを決定した様子がうかがえる。

「艶福物語」で「なんの反響もなかった」にも関わらず、源氏がこの言葉を題とすることを躊躇したのは、使用者の変化が言葉の性質をも変化させてしまうことに気付いたからだろう。題にするということは作者が「三等重役」という言葉を使用することであり、重役自身が自嘲気味に使う自称から、重役でない人間が重役を非難する他称へと変化してしまう。自嘲から皮肉への変化を感じ取ったからこそ、「三等重役」という言葉を用いることに相当な覚悟を必要としたのではないだろうか。

そして源氏は『三等重役』を連載するにあたり、「三等重役」の定義を変更している。『三等重役』連載開始の一

週間前に発表された作者の言葉には次のように書かれている。

三等重役といっても決して蔑称したのではなく、たとえば三等席のように大衆に一番親しみのある、戦後派の重役さんの意味です。勿論、急に出世したので、ちょっとぐらいい困った点があるかもしれませんが――。

〔次号から〕『サンデー毎日』昭和二十六年八月五日号

「急に出世した」「戦後派の重役」という基本的な意味は変わらないものの、源氏は「三等重役」という言葉が蔑称であることを否定している。さらに、程度の低さを表す言葉として用いられていた「三等」に親しみやすさというプラスの意味を付加している。

井上ひさしは当時の状況として「x等」という言い方が日本人に親しい言い方だったこと、マッカーサーが記者団に語った「日本は四等国に転落した」という言葉によって「四等国」が流行語になっていたことを挙げ、「四等国から三等への格上げ」⁽¹³⁾を感じさせると述べている。「x等」という言葉への親しみを利用して源氏が「三等重役」にプラスの意味を加えたことは前述したが、「四等国」という言葉が流行・浸透していたことによっても、プラスの意味が付加されたのではないかと思われる。

ここまで、「艶福物語」から『三等重役』へと移るにあたって、源氏が「三等重役」という言葉が持っていた否定的な印象を薄めるとともに、積極的な意味を加えていることを確認した。最後に、『三等重役』では「三等重役」という言葉がどのように用いられているのか確認していく。

四.

『三等重役』では計十回「三等重役」という言葉が使われている。一覧は次の通りである。

- ① この三等重役め、とい、返してやりたいくらいであった。(浦島課長・第1話)
- ② 「何んだい? また、うちの三等重役さんが、訳の分らんことでも云いだしたのかい? 放っとけばいゝよ。」(浦島課長・第5話)
- ③ 「いやいや、浦島さん。あなたはうちの社長のことを、いつも三等重役なんておっしゃるが、社長が三等なら、ほかの重役たちは四等か五等、いくなれば番外重役ですよ。」(若原君・第5話)
- ④ かつて秘書の若原君から、社長が三等重役なら、ほかの重役たちは四等か五等、言うなれば番外重役である、と酷評されたその番外さんたちは、(語り手・第14話)
- ⑤ 「ほう、三等重役、東京を罷り通る、と言うところだな。」(浦島課長・第14話)
- ⑥ 「どうも、うちの三等重役には困るね。」(東京の会社員・第14話)
- ⑦ 「三等重役って、何かね。重役にも、東京では汽車みたいに等級があるのかね。」(桑原社長・第14話)
- ⑧ 「うん、社長か。要するに、三等重役さ。何んにも取得がないね。つまらん男だ。」(塩野君・第33話)
- ⑨ 「うん、桑原社長かね。あれは要するに、三等重役さ。何んにも取得が無いね。つまらん男だ。(略)」(野見山君・第33話)

⑩ 「三等重役、バンザーイ。」(南海産業社員・第35話)

(丸括弧内は話者と話数を示す)

『三等重役』における「三等重役」の特徴を、「二」との比較に基づき三点挙げる。一点目は『三等重役』の戦後派遣重役である桑原社長より下の立場の人物が使っていることだ。「艶福物語」から『三等重役』へと移るにあたり、「三等重役」という言葉が自称から他称へと変化したことは前述したが、その際に、どの立場の人物が使うのかという問題が発生する。『三等重役』では④と⑦を除き、桑原社長よりも下の立場である課長や平社員によって用いられている。重役自身が使っていた「艶福物語」と違い、社長自身は「三等重役」という言葉を知らないという設定(⑦)になっている。

二点目として、否定的な要素が薄まっていることが挙げられる。「艶福物語」では単体で否定的な意味を持ち、それを強調する言葉が補われていたが、『三等重役』では「三等重役」単体で否定的な要素を強く持つものは①の「この三等重役め、といい返してやりたいくらいであった。」という文章のみであり、②「訳の分らんことをいいたす」⑤「罷り通る」⑥「困る」⑧⑨「なんにも取得がないね。つまらん男だ。」のような否定的な評価を示す言葉が後につくことで否定的な印象となっていることがわかる。

三点目は四等・五等のような「番外重役」の上に該当する言葉として使われることである。「艶福物語」と『三等重役』の二作で「三等重役」の違いが決定的なのは、誰と比較するのかという問題である。「艶福物語」が一等・二等に該当する重役と比較されていたのに対し、『三等重役』では③④のように四等・五等といった「番外重役」と比較され、常にその上に該当する言葉として使われている。『三等重役』にも「艶福物語」で挙げられたような

一等・二等に該当する戦前派重役は登場するが、彼らが「〇等重役」と表現されることはない。

また、『二等重役』内で唯一「三等重役」の定義が示されるのは、第十四話「東京を罷り通る」での「それはですね、社長。汽車だけは一等に乗らんと承知しなくせに、実力は三等並みの重役のことなんです。東京に多いんです。」⁽¹⁴⁾というセリフのみである。これは「艶福物語」と異なる定義であるとともに、その説明を聞いて若原君に小突かれる浦島さんの様子から先の説明とは違う意味が存在することを表している可能性が高いが、正確な定義が『三等重役』で述べられることはない。正確な定義を述べるには「一等重役」「二等重役」の説明が不可欠であるが、『三等重役』では徹底してそれを避けているのではないだろうか。『二等重役』では、「三等重役」が蔑称として成り立つような場面・表現を回避していると言えるだろう。

ここまで見てきたように、「三等重役」における『三等重役』は、その言葉自体に蔑みの要素があることは否定しないものの、その要素はできる限り薄められ、大衆と同じ立場から誕生した戦後派重役を象徴する他称として用いられている。「三等重役」の比較対象は常に「四等か五等」の「番外重役」であり、物語内では「三等重役」が一番上の存在として描かれている。「平取締役」⁽¹⁵⁾であり曾和さんに敵うことのない「艶福物語」の横山さんに比べ、桑原さんは社長という設定であり、他社の戦前派重役にも慕われる存在として描かれている。このことから『三等重役』では戦後派重役自体を優れた存在として描いていると言える。

『三等重役』では「三等重役」という言葉に積極的な意味を付与しており、それに沿った重役像を描いているのではないだろうか。

おわりに

本論では「三等重役」が初出した作品である「艶福物語」と、その物語をきっかけに誕生した『三等重役』における「三等重役」という言葉の印象を比較した。「艶福物語」で戦前派重役と比較した際の蔑称として用いられた「三等重役」は、否定的な要素をできる限り排除して積極的な意味を加え、戦後派重役を象徴する他称として用いられることによって当時の人々に広く用いられる言葉へと変化した。『サンデー毎日』では昭和二十七年二月十四日号から「三等席」というタイトルで劇評の連載を開始しているが、このことは『三等重役』の人気ぶりを表すとともに、『サンデー毎日』が親しみやすさを強調する形で「三等」を用いていることを示すものだとと言えるだろう。また、「三等重役」という言葉のイメージが変化したことによって、源氏の描く戦後派重役像も変化した。「艶福物語」や『三等重役』では妾を持つことが重役のステータスであるという価値観が示されるが、桑原社長は四人の女性から誘惑されながらも肉体関係を結ぶことはなく、家庭を大切にす愛妻家として描かれる。『三等重役』では、浮気を遂げられないということを通して桑原社長の純潔性が強調されるが、性道德の頹廃から純潔教育の重要性が叫ばれ始めるようになった当時の状況において、桑原社長のような男性像は好意的に受容されたと考えられる。『三等重役』における桑原社長の性規範と時代状況との関わりについての詳しい論考は、別稿を期したい。

〔注〕

(1) サラリーマン小説の代表的な作品としては他に中村武志〈目白三平〉シリーズや山口瞳『江分利満氏の優雅

な生活』などが挙げられる。また、近年伊井直行は「会社員小説」というジャンルを提唱し、『会社員とは何者か?』において多くの「会社員小説」を取り上げているが、その源流をなす作家として源氏の名を挙げている。

- (2) 真実一郎『サラリーマン漫画の戦後史』洋泉社 平成二十二年
- (3) 源氏鶏太「三等重役(最終回)」『サンデー毎日』昭和二十七年四月十三日号
- (4) 源氏鶏太の回は昭和四十八年七月二十二日から八月五日にかけて全九回連載された。略歴の鉤括弧内の文章で注記のないものは「出世作のころ」からの引用である。
- (5) 十返肇「解説」『新日本文学全集』第十四巻 集英社 昭和三十七年
- (6) 源氏鶏太『わが文壇的自叙伝』集英社 昭和五十年
- (7) 野村尚吾『週刊誌五十年』毎日新聞社 昭和四十八年
- (8) 『出版年鑑』一九五三年版 出版ニュース社 昭和二十八年
- (9) 桑原社長が仲人をした(もしくはする予定の)夫婦に限定すれば十一組だが、浦島さんが仲人をした夫婦が一組いるため十二話とした。さらに桑原社長の娘・名代子と高砂機械工業の社員・加島のカップルのように、社外の人間の恋愛話も存在する。
- (10) 『日本国語大辞典 第二版』第六巻 小学館 平成十三年
- (11) 源氏鶏太「三等重役の応接間」『サンデー毎日』昭和二十七年四月二十日号
- (12) 『現代用語の基礎知識』一九五四年版 自由国民社 昭和二十八年

自由国民社が運営するウェブページ「月刊基礎知識」(<http://www.jiyu.co.jp/GN/cdv/index.html>)内の

「三等重役」の欄には「本誌1953年版収録」とある。自由国民社に確認したところ、『現代用語の基礎知識』一九五三年版は存在せず「三等重役」という言葉が掲載されている一番古いものが一九五四年版であること、「本誌1953年版」というのは一九五三年に編集した一九五四年版を指すのではないかとの回答をいただいた。

- (13) 井上ひさし「ベストセラーの戦後史 8」『文藝春秋』第六十六巻第一号
- (14) 源氏鶏太「三等重役(第十四回)」『サンデー毎日』昭和二十六年十一月十一日号
- (15) 源氏鶏太「艶福物語」『サンデー毎日別冊』昭和二十六年三月